



書評

[評者]

森 伸晃

昭和医科大学医学部内科学
講座臨床感染症学部門

発熱診療 プラチナマニュアル

川村 隆之, 三村 一行 著

●三五変 頁 352 2025 年 9 月
定価: 3,080 円 (本体 2,800 円+税 10%)
[ISBN978-4-8157-3135-9] MEDSi 刊



診断の「型」と「思想」を学ぶ、全医師必携の一冊

発熱診療は、医師であれば誰もが日常的に直面するにもかかわらず、その「型」や「診断ロジック」を体系的に学ぶ機会は驚くほど少ないのが現状です。私は総合内科での研鑽を経て感染症専門医として勤務していますが、本書を手に取り、これまで現場で培ってきた診断の考え方や知識が、明快にそして体系的に言語化されていることに感動しました。これ一冊で発熱診療の本質を学べる若手医師たちが、心から羨ましく感じます。

発熱診療の現場では、ときに安易に多くの検査がオーダーされがちです。しかし、往々にして検査を出しても診断にたどり着くことはなく、むしろその結果に惑わされてしまうリスクを伴います。本書が貫く重要な思想は、「検査前確率を見積もり、適切な診断ロジックに基づき仮説を立てる」という、診断学の根幹です。闇雲な検査の前に立ち止まり、病歴聴取と身体診察から鑑別を絞り込む思考プロセスを、本書は明確に示してくれます。

本書の魅力は、その実践的な構成と誰もが模倣できる「型」にあります。第1章「発熱診療のために必要な前提となる考え方」は、発熱患者を前にした際の思考の土台を築くため、全医療関係者必読の章です。そして、第2章「さいたま式発熱診療7ステップ」は、著者らが実践する診療プロセスをそのままトレースできる「型」を提供してくれます。発

熱診療では何を重視するかによってさまざまな「型」がありますが、この「さいたま式」は包括的かつ論理的な構造となっており、初学者はまずこれを模倣することから始めるのが良いと思います。一方でこのマニュアルは、初学者から比較的发熱診療に長けている先生方まで、幅広い医師層に役立つ構造をもっています。病棟での入院担当医（研修医や専攻医）にとっては、第5章(2)「入院中の発熱（院内発熱）」が特に実用的です。さらに一歩踏み込みたい医師には第7章「クラスター分類」や第8章「複数フォーカス型になる疾患」が、鑑別診断を深めるうえで非常に有用です。個人的に気に入っているのは、「各論ひとくち解説」です。鑑別に挙がるが、ついつい忘れがちな疾患のゲシュタルト（全体像）を簡潔にまとめており、まさに実臨床の痒い所に手が届く工夫だと感じました。

発熱診療といえば、反射的に「血液培養、胸部X線/痰培養、尿一般/尿培養」という fever workup 3点しか思い浮かばない医師や、入院中の発熱を「7Ds」という一部の鑑別疾患の語呂合わせだけで対応している医師にこそ、本書を強くお勧めします。本書は、同シリーズの『感染症プラチナマニュアル』と同様、単なる実践的なあんちょこ本の域を超えています。そこに込められた診断の「思想」までが透けて見える、実践的でありながら哲学的な良書です。